

いる。

以上の資料の検討を通じてニーホフは、アレクサンドリアの文献学が洗練の度合いを増したのは、「問いと答え」の方法に示されるアリストテレス的概念を明確に採用したことによるのであり、フィロンの意義は彼自身もかつてはその影響下にありながら、時代状況に応じてその転換を図り、最終的には独自のアレゴリー解釈によって正典としての聖書の位置づけに寄与した点にあることを示している。その意味で本書はヘレニズム・ユダヤ教の複雑な発展の理解に一つの明確な道筋をつけると同時に、その成果はキリスト教思想家やラビたちの内在的聖書解釈の成立のみならず、ポルピュリオスやロンギノスなどの新プラトン派のアレゴリー解釈の問題にも示唆を与えるものである。

KRÁNITZ Mihály

ÓRIGENÉSZ: A hit nagy mestere

(クラーニッツ・ミハーイ『オリゲネス：信仰の偉大なる師』)

Catena monográfiák 10, Budapest: Kairosz Kiadó, 2008, pp. 276,

ISBN 978-963-662-030-1, ISSN 1587-2599, A/5, 3000 Ft.

秋 山 学

本書は、評者が本誌において継続的に紹介を行っている「カテナ・シリーズ」のモノグラフ第10巻に相当し、著者の既発表論文集に当たるものである。まず、著者のクラーニッツ・ミハーイ師は1959年8月10日ブダペシュト生まれ、1989年6月10日にブダペシュトにてローマ典礼カトリック教会の司祭に叙階される。1990-91年ブダペシュト郊外ヴァーツィ通り教会での助任司祭職を皮切りに、1991-93年ローマ・グレゴリアナ大学での研鑽期間をはさみ、1993-97年ブダペシュトの神学アカデミー総監 (prefektus) 職を経た後、1996年よりパーズマニ=ペーテル・カトリック大学基礎神学講座の主任を務めておられる。この間2003年から2006年まで、パーズマニ大学学長代理の要職に就いておられた。

筆者は、クラーニッツ師とは年に二度お目にかかることが多い。それは、6月

末に年次大会が行われるハンガリー教父学協会（現在会長はシヨモシュ・ローベルト氏、2013年は第13回大会；会場は2011年までケチケメート市、2012年は西部のティハニ修道院、2013年からは東北部のニーレジハーザ市の予定）、および8-9月に南部の中心都市セグドにて行われるセグド国際聖書学会（ベニック・ジュルジ師が主宰、2013年は第25回大会）の二度である。つまりクラニーツ師は、上述のように教義学的分野を専門領域としながら、常に教父ないし聖書という神学テキストに立脚しつつ、現代世界に福音の意味を問おうとする研究者なのである。それらの学会における研究発表の内容は、広く新約聖書諸文書からオリゲネスにまで及ぶ。また師は、外国語として英・独語はもちろん、卓抜な仏語と伊語を操られる。カトリックの司祭として司牧活動にも熱心で、第二ヴァチカン公会議開催40周年を記念して出版された『公会議文書解説資料集』の責任編集者を務められたほか（Szent István Társulat 社刊、2002年）、Szent Gellért 出版社からは『聖女リタをめぐる黙想』（2010年）、『光に向かう霊の道』（2011年）など、四旬節を中心に行われる霊的指導のテキストにも健筆を揮っておられる。ヴァチカン放送ハンガリー一部局・ラジオ番組への出演も数多い。それらの執筆・講演活動の類のすべてにおいて、非常に真摯で実直なそのお人柄のうかがわれる、古風で精緻、時に難解なハンガリー語を通じて、自らの思索・観想活動の実りを披瀝される方である。

以下、目次に沿って本書の内容を紹介しよう。本書はまず、教皇ベネディクト16世による2つのカテケジス、すなわち2007年4月25日（水曜日）および翌週5月2日に行われた一般謁見での講話のハンガリー語訳から起こされる。これらの講話において教皇は、オリゲネスのことをたびたび「師」（mester）と呼んでおり、これが本書の書題の基にある。

第1部に当たるのが「オリゲネスの生涯とオリゲネス研究」であり、オリゲネスの生涯と、彼に関係して今日まで行われてきた研究史の詳述が行われる。これによりわれわれは、神学の誕生と21世紀にまで至るその歩みを理解することができる。この第1部は「前書き」と「序論」に続き、「I オリゲネスの生涯と人物像」「II オリゲネスの源泉」「III オリゲネスの教説」の3部で構成される。まず第I章は「1 アレクサンドリア教会での活動期」「2 カイサリア教会での活動期」に分かたれる。続いて第II章は「1 古代アレクサンドリア」「2 オリゲネスとユダヤ人たち」「3 オリゲネスとギリシアの〈パイディア〉」「4 オリゲネスと

聖書」の順に記される。そして第Ⅲ章は「1 古代におけるオリゲネスの影響」「2 中世におけるオリゲネスの影響」「3 ルネサンス期におけるオリゲネスの影響」「4 近世におけるオリゲネスの影響」「5 現代におけるオリゲネスの影響」となっている。オリゲネスの生涯を辿る部分では、年代順にエウセビオスの記述を基にして、それに対するどのような批判的研究が現れたかを吟味する、という形式が採られている。また学説史を左右する重要な研究に関しては、原語でそれら学説の各々が脚注にて引用され、非常に有益である。

続く第2部に当たるのは「修道性の源泉としてのオリゲネス」である。これは「Ⅰ anachōreō（隠遁する）という表現の起源」「Ⅱ 先行する諸現象」「Ⅲ エジプトにおける初期修道制のルーツ」「Ⅳ オリゲネスの思想におけるキリスト教的修道制の模範としての殉教」「Ⅴ オリゲネスの語用法における動詞 anachōreō：初期修道制のしるし」「Ⅵ 結論」で構成される。著者によれば、修道制の発展のなかで、この教会著作家の役割は決定的であった。それは彼の著作がキリスト教古代にあって、複数に及ぶキリスト教徒の世代が形成される時期に当たったためであり、後に修道の生を送る人々が、オリゲネスの記した指針に従ったためとされる（87頁）。

そして第3部に相当するのが、本書の中心的な位置を占める「オリゲネスに至るまでの良心（syneidēsis）の展開」である。この第3部は序章および「Ⅰ「良心」という概念の形成」「Ⅱ 新約聖書および後2世紀の諸文献における「良心」という概念」の2部構成でできている。第Ⅰ章は「1 この概念の起源・用法・意味」「2 旧約聖書およびユダヤ教における「良心」の概念」「3 ギリシア世界における「良心」の概念」「4 結論」で構成され、さらに『新約聖書における「良心』』（1955年）の著作をもつピアースの分析結果を基に、「5 C. A. ピアースによる研究」という補章が付されている。さらにこのうち第2節は「1 七〇人訳およびユダヤ・ヘレニズム文献」「2「良心」の表現」「3 フィロン」「4 フラウィウス・ヨセフス」、第3節は「1 キリスト教以前のギリシア文学」「2 エピクロス派」「3 犬儒学派」「4 ストア派」に分割されている。一方第Ⅱ章は「1 福音書の語用法」「2 聖パウロの教説」「3 聖パウロ以降の諸文献」「4 使徒教父」「5 アレクサンドリアのクレメンス」「6「良心」と守護の聖人の役割」「7 結論」で構成される。このうち第2節は「1 裁きと指針」「2 人格化された「良心』」「3「良心」の判断としての和解」「4 聖パウロの独自性」より構成され、第3節は「1

司牧書簡」[2『ヘブライ書』][3『第1ペトロ書』]に分かたれている。第5節および第6節では原語に基づく詳細な解析が行われていて、第5節は「1 学と知としての *syneidēsis*」[2 他者に関する知識としての *syneidēsis*」[3 神的な *syneidēsis* と価値知][4 善き「良心」・汚された「良心」][5 価値知としての「良心」]に、また第6節は「1 悪霊」[2「二つの道」「二人の天使」の理論][3 霊と「良心」][4 守護の天使][5 洗礼における守護の天使]に分かたれている。

この第3部は、同題目のもとに *Studia Theologica Budapestinensia* の第29巻として、「パーズマニ=ペーテル・カトリック大学神学部叢書」の一冊というかたちで2002年、Márton Áron Kiadó社から公刊された全148頁の単行本の再録である。ただし全体の構成が非常に重厚であることに加え、この「オリゲネスと「良心」というテーマが、著者が序章でも触れているとおり(101頁)、トマス・アクィナスが『神学大全』第1部第79問第13項「良心は何らかの能力であるか」において、『ローマ書注解』(ad 2, 15)におけるオリゲネスの見解を批判していることを背景に設定されていることに鑑みて、大変興味深く、新しさを失っていないと思われる。

続く第4部に当たるのが「オリゲネスにおけるイエスの人間的霊」である。序章に続き、「Ⅰ キリスト論の発端」「Ⅱ『原理論』2,6における「キリストの人間的霊」」「Ⅲ 結論」より構成される。キリストの神性と人性の関係という問題は、エフェソス公会議・カルケドン公会議を初めとする古代公会議において中心的な論点となった問題であるが、この問題をオリゲネスにおいて再度問い直そうというのが著者の意図である。

そして第5部に当たるのは、ハンガリー語訳による「オリゲネスの伝承による三つの復活説教」の紹介である。これは *Sources Chrétiennes* シリーズの第36巻として、P. ノータンの訳により『復活祭説教』の第2巻というかたちで1953年に公刊されたものである。最後に巻末には、詳細な文献一覧と固有名詞索引が付されている。

ハンガリー人による教父学研究といえば、『オリゲネスにおける神の父性』(1960年)の著書で知られ、上智大学での教授・宣教活動が長きに及んだネメシュヘジ・ペーテル神父の名がわれわれにも親しい。本書の著者クラニッツ師は、修道会所属か教区司祭かという違いはあるものの、教義学者としてオリゲネス研究を第一義に据えるという点で、また司牧活動と研究活動の二面において多忙で

あるという点で、ネメシュヘジ師を髣髴とさせるような学者である。論文集という体裁を採っていることもあり、われわれがオリゲネス研究の新たな知見を本書から汲み取ることを期待するのは難しいかも知れない。しかしながら前世紀後半以降におけるオリゲネス研究の状況は、20世紀における「オリゲネスの完全復権」がしばしば話題になるように、かつて異端の烙印を押され焚書の憂き目に遭った人物とは思えないほどの隆盛を誇っている。本書の第1部において、オリゲネス研究史をたくみに鳥瞰してゆく著者の手腕はまことに見事であり、研究史の総括によってであれ、われわれの学びうる点が少なくないということを実感させてくれる。またオリゲネス自身というよりもオリゲネスに至るまでの「良心」概念の推移を克明に辿った第3部は、上述したように、このテーマが従来、教義学・基礎神学の絶対的権威とされてきたトマス・アクィナス『神学大全』の記述を背景に起こされたものであることを理解させ、かつ著者がハンガリーの教義学分野での責任者とも言う立場にあるだけに、尽くせぬ興味を喚起する。様々な点でわれわれに学ばせてくれることの多い本書を、好著として推薦したい。

Andrew Radde-Gallwitz

*Basil of Caesarea, Gregory of Nyssa,
and the Transformation of Divine Simplicity*
Oxford: Oxford University Press, 2009, pp. xxii + 261

土 橋 茂 樹

本書は、シカゴ・ロヨラ大学神学部の assistant professor である著者が、2007年にエモリー大学から博士学位を取得した際の学位論文「《求めよ、さらば与えられん》：神の単純性とカイサレイアのバシレイオス及びニュッサのグレゴリオスにおける〈神を知ること〉」にかなりの加筆訂正を施したうえで、Oxford Early Christian Studies シリーズの1冊として公刊されたものである。著者はその後、2011年に本書が高く評価されて、優れた学位論文に与えられるテンプレート賞を受賞、同年には Mark DelCogliano との共訳でバシレイオス『エウノミ